

派遣者番号	R6K05	氏 名	荒井 一聴
研究主題 —副主題—	総合的な学習の時間において児童が意欲的に課題を追究し続けるための教師の支援の考察		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	大村 龍太郎
所属	福生市立福生第五小学校	所属長	泉田 巧人

キーワード：

総合的な学習の時間、学習意欲、動機付け、メタ認知

要旨：本研究は総合的な学習の時間において、学習を調整することが苦手な
ことにより学習意欲が停滞してしまう児童が、自ら課題を追究し続けられ
るよう、教員がどのような支援を行えばよいかを実践と考察を通して明
らかにすることを目的とした。本研究では動機付け支援とメタ認知支援
を組み入れた単元計画を考案し実践した。結果として、動機付け支援で
は外部講師を招くだけでは、児童の学習意欲を高めるには不十分であつ
た。外部講師を招く前の支援策も必要なことや、どのように活用するか
について再考する余地がある。メタ認知支援では、思考ツールや協働的
な学習を通して、児童は自身の課題を明確にし、学習意欲を持続させる
ことができた。支援策以外に分かったことは、教員の共につくり上げて
いく姿勢や、児童への言葉掛けが、児童の心理的安全性を高め、学習意
欲の向上につながる可能性があるということである。課題は他の学習意
欲の理論に基づいた研究についても実践を行い、検証していくことであ
る。

総合的な学習の時間において児童が意欲的に課題を追究し続けるための 教師の支援の考察

荒井 一聴

1 研究の目的

教員が計画通り総合的な学習の時間の授業を実践したときに、児童が探究活動に長期間意欲をもって取り組むことが難しい様子が、筆者の勤務していた学校だけでなく、様々な学校で散見された。また、児童の学習意欲の維持について、多くの教員が悩んでいた。

教育心理学を研究している櫻井(2023)によると、学習意欲を維持できない理由を四つの理論に整理している。本研究では「学習活動の制御・調整を重視する理論(自己調整理論)」(以下、自己調整理論と表記)に着目した。理由は、筆者や所属校の学級担任がペーパーテストでは点数を取れるが自律的な学習ができない児童への支援策に困難を抱えていたからである。そこで、本研究の対象を自己調整理論による学習意欲が停滞している児童とした。総合的な学習の時間において、自己調整理論による学習意欲が停滞する児童に焦点化された先行研究は、管見の限り見当たらない。本研究では、総合的な学習の時間において、学習活動の制御・調整を苦手とすることによる学習意欲が停滞してしまう児童が「自ら学びたい、探究したい」という意欲を持続して学習に取り組むようにするためには、どのような教員の支援をしていけばよいかを考案し、実践と検証をしてその効果を考察していくことを目的とする。

なお、本研究では、「児童が意欲的に課題を追究し続ける」姿を、櫻井(2024)の教育心理学での「学習意欲」を参照しながら、「(1)教師の指示を待つのではなく、能動的に取り組んでいる(2)難しいことにも諦めず、粘り強く取り組んでいる(3)より良いものへ改善していこうとしている」姿とした。

2 研究の方法

学習指導要領や日本生活科・総合的な学習教育学会の学会誌掲載論文をはじめ、多様な研究論文や書籍を基に児童が学習意欲をもって取り組めるような支援を考案する。

基礎研究を基に、単元計画と支援策を考案し、勤務校で担任が授業実践をする。本研究は、児童二人の学習意欲の持続を単元の開始から終わりまで経過観察する。児童の授業中の様子、音声記録、ポートフォリオ記録、授業後のインタビュー等複数の観点から複合分析を行う。

3 研究の成果

(1) 教師の支援の考案

A 動機付け支援

学習対象との出会わせ方を工夫し、動機付けを図る。本研究実践では単元の始めに外部講師を2回招き、地域の魅力や課題について講演をしてもらったり、交流を行ったりした。課題解決に相応しい問題に複数の視点から出会わせることで、児童自身が問題の自分ごと化を図ったり、学習への必要感、目的意識、相手意識を高めたりした。

B メタ認知を促す支援

教育心理学の研究者である櫻井(2024)は、「自分あるいは他者が行う認知活動を一段高いところから認知する(捉える)」メタ認知の重要性を述べている。本研究でもメタ認知につ

いて同様の定義とし、このメタ認知を働かせることで、学習意欲を促していく支援を考案した。本研究でメタ認知を促すように以下二つの支援を組み入れた提案をした。

B－１ 思考ツールの活用

木村（2023）は、Zimmerman の研究を基に、自己調整学習（Self-regulated learning）における「見通すフェーズ」を提案した。「見通すフェーズ」では思考ツールを活用し、思考を可視化し、メタ認知を働かせることで課題の設定をした。筆者は、課題の設定において自己調整学習スキルの考えを用いた思考ツールを活用することでメタ認知を促し、思考を整理することは前述の児童に対して有効であると考えた。具体的な手順として、まず問いを広げ、次に問いを順序立てし、最後に問いを絞ることで課題を設定する。

B－２ 他者との協働

三宮（1996）は、対話・討論によるメタ認知の促進が図れることを述べている。他者との対話を通し、指摘や助言を受けることで、自身の取組を多面的・多角的に捉えることができると考えられる。今回の研究では小集団のグループを形成し、協働できる環境づくりを行った。また、教師をはじめ、多様な大人からフィードバックをもらえる機会を設けることで、より広いメタ認知を促すようにした。

(2) 授業実践の結果

動機付けを図るために、外部人材を単元の最初に招く支援を行ったが、児童にとって効果は十分ではなかったように見られる。当事者意識や課題意識は突然現れるものではないので、児童がその外部人材に出会う前に教師が児童の興味を喚起することが重要になってくるのではないかと考える。次に、メタ認知を促すための思考ツールの活用では、「イメージマップ」、「順序立て」、「ピラミッドチャート」を用いて児童が課題を設定することで、自身の取り組みたい課題を設定していた。メタ認知を促し学習意欲の向上に役立っていたと考える。もう一つのメタ認知支援策である他者との協働の実践では、児童同士がお互いに助言をし合うことで新たな視点に気付くことにつながり、メタ認知が促された。以上より、メタ認知を促すことで学習の方略が明確になり、学習意欲の高まりにつながっていたと考えられる。

4 まとめと課題

地域人材等の活用では、児童が地域人材と出会う前も含めた単元計画を考えていく必要がある。メタ認知を促す支援策は本研究の対象児童にとって有効なものであった。考案した支援策以外では、教師の何気ない助言や励まし、振り返りシートのコメント等の支援が児童にとって有効だった。これらで児童の学習が価値付けされ、学習意欲の持続や高まりに良い効果を与えていたのではないかと推察した。課題として、今回は自己調整理論に着目して実践をしたが、他の三つの理論についても今後研究していく必要がある。

5 成果の活用法

本研究は総合的な学習の時間の授業づくりにおいて重要な要素を再認識できたことに価値がある。本研究で得られた知見を今後の授業づくりや授業実践に生かしていきたい。

6 参考文献

木村明憲（2023）『自己調整学習』明治図書、pp. 41-49

櫻井茂男（2024）『ウェルビーイングをデザインする 小中学生の非認知能力』図書文化社、pp. 72、pp. 82

櫻井茂男(2023)『改訂版 たのしく学べる最新発達心理学 乳幼児から中学生までの心と体の育ち』、図書文化社 pp. 118

三宮真智子(1996)「思考におけるメタ認知と注意」『認知心理学4』東京大学出版